

神様から与えられた使命

創世記 45 章 1 節～15 節
2026 年 1 月 18 日
松田 基子師

人は誰も生れながらに自己中心の心を持って生きています。それは人生の生き方において、命は自分のもの、人生も自分のもの、自分の人生なのだから自分の思ったように考えたように生きるのだ、となって表れます。

でも人は自分の思い願い通りに生きて、本当に幸せだと心の底から感謝できるのでしょうか。

聖書は、私たち人間一人ひとりは、偶然に自然発生的に生れてきたとは言っていません。人は誰も、世界に何十億の人がいようと、神様の御心により命と使命を与えられてこの世に生まれ、その使命を果たすように生かされていると教えてています。

ですから人間の本当の幸せは、自分の思い、願い通りに生きることではありません。自分の命は自分のものであるように思えるのですが、実は神様のもので、神様にお返しする命であることを自覚して、預かった人生に神様からの使命が与えられていることを受け入れ、自分に与えられた使命を求めるだけ、誠実に歩み抜いたところに喜びと感謝が生れるのです。実はそこに人生の真の喜び、真の祝福があるのです。

しかし、具体的な使命、それはそんなに簡単に分かるものではありません。私たちが生れる時に、神様から「あなたに与えた使命はこれです。これに向かって人生を歩みなさい」という言葉が体にでも書かれて生れて来ることができるのなら良いのですが、それは自分で神様に求め、色々と経験して行く中から悟って行かなければ分らないものです。

そこには自分の思い通りに生きていきたいという誘惑が常にあります。でも、失敗しては立ち返り、行きつ戻りつ軌道修正しながら、御心を求

め続けるなら、神様からの使命を見出せるでしょう。

今朝は、ヤコブの息子たち、ヨセフと 10 人の兄たちの人生からそのことを学んで 参りましょう。

ヨセフの人生は、兄たちが自分達の思い通りにしたことによって、17 才の時、エジプトの奴隸に売られるという、思ってもみなかつた人生の激震に出合いました。

ヨセフは兄たちとは母親が違いました。そのため父ヤコブはヨセフを偏愛しましたが、当のヨセフはどの兄も兄弟であり、慕わしさを覚えていたに違いありません。それなのにヨセフは兄たちによって奴隸に売られてしまいました。ヨセフがエジプトに向かう隊商に売られた時、長子ルベンは居合わせませんでしたが、そこに 9 人の兄がいても、ヨセフを助けてくれる兄は一人もいませんでした。ヨセフは盗族にさらわれたのではありません。兄たちによって売られたのです。彼は兄弟としての肉親の情を抱いていただけに、兄たちのあまりの非道さに「何故、どうして」と理由を求めて苦しみました。

そう言えば、自分が夢の話をした時の兄たちの険しい顔が甦ってきました。そこで初めてヨセフは、兄たちにとって自分は憎まれた存在なのだとということに気付きました。それにしても兄さんたちは、なんとひどいことをするのだ、赦せない。「神様、助けてください。神様がお与えくださったあの夢を、必ずや実現させてください」と必至に祈ったことでしょう。

一方兄たちは、日頃から自分たちが一番願っていたことを実行したのです。父から遠く離れている時をチャンスとして、ヨセフを殺そうとまで考えました。ところがキャラバンが目に入ると、ユダの提案により利害が働いて、ヨセフを奴隸に売ったのです。17 歳の未成年は銀貨 20 枚でした。高額ではありません。兄たちは憎しみのために、お金では買えない弟ヨセフの命の価値を見失っていました。

彼らは自分たちが思ったように願ったようにすることができました。彼らはそれまで「ヨセフさえ居なければ、父ヤコブは自分たちを大事にしてくれるだろう。あの生意気なヨセフのために、自分たちはどれほど嫌な思いをさせられたことか。ああ、これで清々した」となると思っていたのです。

でも思っていた通りに実行してみると、心は重く顔は曇りました。父に何と言えば良いのでしょうか。野獣に殺されたように見せかけるほかありません。ヨセフから剥ぎ取った晴着を山羊の血に浸しました。しかしさすがに自分たちの口から父を欺く言葉を伝えることはできません。そこで使いを出して、山羊の血が付いた晴着を持たせて父の許に送り「これを見つけましたが、あなたの息子の着物かどうかお調べになってください」と言わせたのでした。

ヤコブの嘆きようは大変なものでした。その後で兄たちは羊を追って家に帰り着きましたが、何も知らないふりをして父を慰めました。するとヤコブは慰めを拒んで死を求めるほどにヨセフのために泣き悲しんだのでした。兄たちの耳には、ヨセフの哀願する声が耳の底から聞こえて來るのでした。

罪というものは人間の心を悪に搔き立て「そうだ、そうだ お前の思う通りだ。お前が思う通りにやればいいのだ」と後押しをしますが、ひど度、その罪を犯してしまうと、今度はクルリと向きを変えて「お前は何ということをしたのだ。お前は神に裁かれるべきだ」と告発するのです。その後も折りにふれて心をチクリチクリと突き差します。

兄たちはヨセフさえ居なければ、父は自分たちに心を向けてくれるだろうと思ったのですが、ヨセフを失ったヤコブは、ヨセフの弟ベニヤミンをヨセフに代って偏愛しました。

ヤコブは父親として失格です。彼は神様を崇めながら、自我をコントロールできない、神様からの使命をしっかりと聞き取れない父親でした。神

の祝福の担い手に選ばれ、12人の息子が与えられたことは、子どもたちにその使命を担わせるために、どの子にも等しい愛を注ぎ、神様に仕えることの尊さ、神様の導きの確かさ、兄弟が力を合わせて神様に従って行く生活を、教え導かなければならなかったのです。自分の気に入った子を偏愛するなどもってのほかです。

子どもたちはそんな親に、もうこれ以上求めることはできないことを悟りました。同時に、自分たちが、この父の心を死なせてしまうほどの悲しみを与えたことに気付きました。

更に気付いたことは、ヨセフ偏愛の父であっても、神様に対する父の信仰は認めていました。その神様がどんな神様か、全てをご覧になっている神様であり、自分たちの犯した罪を全て見ておられたことに気が付いたのでした。彼らは神様が自分達の罪をいつ暴かれるか、心の中は大きな不安を抱えて生きることになりました。

一方、エジプトに奴隸として売られたヨセフは、無実の罪で牢にまで入れられましたが、ただひたすら神様に信頼し、神様の時を忍耐して待ち続けました。彼にはまだ、神様からの究極の使命が何であるのかは分かっていませんでした。ただ神様を見上げて、神様の前で与えられた務めを忠実に果しました。

夢はいつ実現するのでしょうか。神様はヨセフの不遇をも用いて、彼を登場させるべき時へと導かれました。

ヨセフは30歳になりました。神様の時がついに来ました。神様はエジプト王ファラオに、この先起ころ 7 年の豊作と 7 年の飢饉を意味する夢を見させてファラオを不安にさせ、ヨセフの出番を作られました。ヨセフを牢から導き出し、彼に夢を解かせ、ヨセフをその知恵と聰明さによって、エジプトでの最高位である王に次ぐ支配者とされました。

7 年の豊作の期間はまたたく間に終り、飢饉の年がやってきました。飢饉はエジプトばかりでなく、カナン地方、ヤコブの全家も食物の欠乏に見

舞われました。

ヤコブはエジプトに穀物があることを聞きつけると、末子ベニヤミンだけは自分の許（もと）に留め、10人の兄弟たちをエジプトに穀物を買いに行かせました。

エジプトにやって来た兄たちは、穀物を求めてヨセフの前にひれ伏しました。あのヨセフに与えられた夢、畠で兄弟が束をゆわえていると、いきなりヨセフの束が真っ直ぐに立ち、兄たちの束が周りに集まってきてヨセフの束にひれ伏しました。あの夢の通りのことが起ったのです。

ヨセフはその夢を兄たちに語ったために、兄たちから憎まれ、憎しみは増して奴隸に売られ、兄たちは「あれの夢がどうなるか見てやろう」と夢の実現を阻んだのでした。

兄たちが不可能と思ったことを、神様は彼らがどんなに阻んでも道を切り拓いて、ついに実現に至らせられたのでした。

その時、ヨセフだけが夢の実現を悟りました。ヨセフには直に彼らが兄たちだと分かりましたが、兄たちにはヨセフとは分りませんでした。ヨセフは兄たちにスパイの嫌疑をかけて、「潔白を証明したければ末の弟を連れてくるように。それまでは上から二番目の兄シメオンを人質として捕えておく」と言い渡しました。兄たちはこの命令に従わざるを得ませんでした。そこで彼らは互に「ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ。弟が我々に助けを求めたとき、あれほどの苦しみを見ながら、耳を貸そうともしなかった。それで、この苦しみが我々にふりかかった」（創世記42:21）と嘆いたのでした。罪は罪そのものが犯した者を責めるのです。

兄弟たちが重い心を抱えて運んで来た穀物も、大家族ではやがて尽きてしまいます。しかしヤコブはベニヤミンを失うことを恐れ、ベニヤミンも一緒にエジプトに行かせることを許しませんでした。そこでユダがヤコブに、ベニヤミンの身の責任を負うことを約束して、一行は再びエジプトに下り、ヨセフの前にひれ伏しました。

ヨセフはまたまた兄たちを試みました。彼はベニヤミンだけを自分の側に置いて優遇しようと思ったようです。そのためにベニヤミンに盗みの罪を着せて、エジプトに留め、兄たちはカナンに帰そうとしました。

昔のままの兄たちであれば、ベニヤミンを見捨てて自分たちだけでカナンに帰って行くでしょう。

一行はヨセフの思惑を知ることもなくカナンへの帰途に就きました。すると執事が後を追って来て盗みの取り調べをしました。ベニヤミンの袋からヨセフの銀の杯は発見され、一行はヨセフの許に引き帰して来ました。

ユダはヨセフに対して「御主君に何と申し開きできましょう。今更どう言えば、わたしどもの身の証しを立てることができましょう。神が僕どもの罪を暴かれたのです。この上はわたしどもも、杯が見つかった者と共に、ご主君の奴隸になります」（創世記44:16）と平伏して言いました。

ヨセフは奴隸になるのはベニヤミンだけで良いと答えました。ユダは今や、あのヨセフを奴隸に売るよう言い出した時のユダとは根本的に変えられていきました。彼は家庭問題で心碎かれ、神様に心を向ける者に変えられていきました。彼は罪から逃げないで神様の前に出て、ヨセフを奴隸に売るよう兄弟を惑わせた自分こそ、奴隸になるべきだと悟ったのでした。

自分たちの一族は、アブラハム、イサク、ヤコブそして自分たちへと、神の祝福を担うために生かされている。自分には父と兄弟たちを生かす使命が与えられている。自分こそ奴隸になって一族を生かすべきだと示されたのです。ユダはヨセフに「どうか私をベニヤミンに代わってあなた様の奴隸にし、ベニヤミンを父のもとに返してください」と心から願いました。

ヨセフはユダが自分を捨てて父と兄弟たちを生かす姿を見て、彼の心も変わりました。自分がヨセフであることを明かしました。兄たちは驚きと恐怖に襲われました。どんな言葉がヨセフの口から出てくるのでしょうか。45章4節から

「『どうかもっと近寄ってください。』兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。『わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この2年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから5年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここに遣わしたのはあなたたちではなく神です』」（創世記45:4～8）とヨセフは言っています。

自己中心から自分の思いのままを訴える言葉は一言もありません。ヨセフはここで、ただ真っ直ぐ神様を見上げ、神様のご計画をはっきりと読み取り、自分の使命がこの日のためであったというその一点に心を注いでいます。とても自分の思い考えからは発することのできない言葉です。ヨセフは神様から与えられた自分の使命が自覚できた時に、人間の思い考えでは赦すことができない兄たちの罪を赦し、そこに神様の御計画の光を当てたのでした。ヨセフは自分が受けた苦しみに対する償いを求めるのではなく、神様の祝福の担い手として選ばれた一族の命が守られ、神様の御計画が進んで行くこと、そのために自分が用いられるに使命があったことを悟ったのです。

ここまで来るのに、エジプトに来てから20年あまりの歩みが必要でしたが、ヨセフは逆境に置かれた時も、順境の日も、どんな時も神様の御心を求めて歩んできました。その全てがこの日のためであったことが分り、神様の真実を心から崇めたのでした。ヨセフの言葉に、ユダも兄弟たち皆が、自分たちは神様に選ばれ、祝福の担い手とされていることを悟りました。

神様は彼らがその使命に生きたことによって、ユダの系譜からイエス・キリストを誕生させられ

ました。イエス様の使命は人類の罪からの贖い（あがない）でした。イエス様が贖いの十字架にかかるてくださったことによって、私たちはもはや自分の罪におびえることなく、神様の救いを受けることができました。

そんな大きな愛を私たちは受けて、今、生かされているのは何のためでしょうか。それは自分の安逸（あんいつ）のためではなく、ヨセフやユダのように他者を生かすためです。実は他者を生かすことは自分が最も生かされる道なのです。家族、社会、国家、世界が皆、他者を生かすために生きるなら、世界は神の平和が支配するでしょう。その一步の歩みに、私たちも神様からの使命を悟って踏み出して行きたいものです。具体的にどう従っていけば良いのか、日々祈り求めて、神様からの使命を果す人生を歩み抜いてまいりましょう。

お祈りいたします。

私たちに命と使命を与えて今を生かしていくくださる神様。

神様からの使命を与えられていながら、御心を求めず自分の思いに生きようとする罪をお赦しください。

隣人を愛し、隣人を生かす使命に立ち返らせてください、具体的に何をなすべきかを悟らせてください。神様から与えられた使命を果せるよう助け導いてください。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン